

建設コンサルタントの 「リアル」。

株式会社 復建技術コンサルタント

本社 / 〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町1-7-25

TEL.022-262-1234

ホームページ / <https://www.fgc.jp>

創 立 ● 1946(昭和21)年

資 本 金 ● 1億3000万円

職 員 数 ● 415名(2022年1月1日現在)

業 種 ● 建設コンサルタント登録(16部門)

IT関連事業

各種コンサルティング・事業支援

都市計画

計画設計(構造設計、交通設計)

環境計画

地盤調査・河川・防災測量

計量証明事業計量(音圧レベル、振動加速度レベル)

関連企業 ● 株式会社ダイワ技術サービス

株式会社トラステック

株式会社復建エンジニアリング

中部復建株式会社

中央復建コンサルタンツ株式会社

復建調査設計株式会社

第一復建株式会社

 株式会社
復建技術コンサルタント
Fukken Gijyutsu Consultants Co.,Ltd.

あなたはまだ、 建設コンサルタントの 本当の姿を知らない。



初めまして、復建技術コンサルタントです。

東北エリアを中心に建設コンサルタントとして実績を積み重ね、

最近では東京・大阪・名古屋・福岡などにも事業展開を進めています。

そもそも「建設コンサルタントって、何だ?」と思っている方も、少なくないと思います。

一言で言えば、道路や河川、橋梁など、いわゆる公共工事の発注を国や地方自治体などから受け、その調査や計画、設計を行うのが建設コンサルタントです。

実際の工事の施工を行うのは大手をはじめとしたゼネコンと呼ばれる企業であり、

その工事は私たちが手がけた調査や計画、設計をもとに行われている、

と考えていただいて間違いありません。

そんな私たちのような建設コンサルタントと言われる会社には、たくさんの人たちが働いています。

そしてその人たちの中には、その分野や領域の「専門家」として頼られる人たちも多くなります。

この入社案内では、当社で働く先輩たちの「リアル」に迫ることで、

建設コンサルタントの「リアル」をあぶり出そうと思っています。

まだ建設コンサルタントというものをよく知らないあなたに、彼らの本当の姿を知っていただくことで、

復建技術コンサルタントで働くことに少しでも魅力を感じてもらえたら幸いです。



「誠実な仕事を続けて」とS・Tさんは言う。
私はその言葉を信じて、
前に進みます。



入社2年目から、「担当」を持たせてもらっています。現在の担当は、宮城県の県北エリア。県や市町村などの自治体のさまざまな案件に、「入札」をさせてもらっています。会議室に置かれた木箱に、本当に札を入れる。「だから『入札』って言うんだ」と、一人で感動したのを覚えています。

入札する案件は道路や橋梁などの土木設計をはじめ、測量や地盤、環境などの調査業務など。当社ではそれにいくらかかるかを事前に提示するのが「見積もり」です。それを踏まえて、「入札」を行います。その価格設定のために、社内の各部門と相談するのはもちろんですが、過去に似た案件の見積もりや入札の金額を調べることも大切です。

「落札」の額は、当社のものでなく、競合他社の「落札」額も調査します。その上で、「これくらいかな」と見積もりの作成、入札金額の決定をし、先輩のS・Tさんに意見を求めます。「いいと思う」と言われることもあれば、「ここはこれくらいがいい」と

指摘されることもある。経験に裏付けられた的確な意見をもらっています。

S・Tさんが「すごい」のは、社内外を問わず、いろんな人から信頼を得ていること。コミュ力が高く、相談をすれば前向きに

してもらえ、相手からも色々な相談を持ち掛けられる。「そんな風になりたい」と思いますが、S・Tさんは「今のまま、誠実な仕事を続けていけば大丈夫」と言ってくれます。その言葉を信じて、私も前に進んでいきます。

01

2019年入社
山形大学文学部卒
R・S

02

2016年入社
東北学院大学法学部卒
S・T

03

2014年入社
東北学院大学工学部環境建設工学科卒
S・A



「土」は、奥深い。ハマる。
知れば知るほど楽しくなる。

「土」に、相当ハマっています。大学へ入った当初は、コンクリートや構造設計に興味がありました。しかし現場の地質状況などが橋梁・道路設計に影響を及ぼすと知り、地盤分野への興味の方が強まり、研究では液状化した砂地盤のせん断抵抗の計測といった室内での土質試験に明け暮れていました。

今の仕事は、主に建造物の新設・補修の際に必要な地質調査を担当しています。実際に現場へ行ってボーリングで掘り上がった土質状況を確認し、液状化や地盤沈下の恐れのある地層があれば、土質

験を行って土の性状を調べたりしています。写真の箱はボーリングで掘ったサンプルを入れる「コア箱」というもので、この箱を縦につなげて土の堆積状況を把握します。現場での調査結果をもとに、橋梁や道路の設計に必要な地盤定数などの設定を行うのですが、これを間違えると設計にも影響が出るので責任を感じます。入社年次も進み、責任のある仕事を任せられるようになってきましたが、まだまだ勉強の毎日です。

仕事を通じて新しい知識や知見が身につくことも楽しいですが、社内サークルのハ

イキング同好会では岩盤などの地質を専門とする先輩方も多く、いろいろ教わるのもモチベーションにつながっています。

自分の仕事が土木工事の根幹を支えている、という誇りを感じてはいますが、いかにせんマニアックな分野なので、自分の仕事を説明するのに苦慮することもしばしばです。食事やお酒の席で一緒になった仕事以外の人たちにどう説明したらわかってもらえるか、いろいろ試しています。



04

K・O
2014年入社
岩手大学大学院工学研究科建設環境工学専攻

まだ見ぬものを「可視化」する。 「可視化」されると感動を呼ぶ。

今回、この入社案内に「出てくれ」といわれ、「これまで一番自慢できる現場で写真を撮りたい」とオファーを受けて、すごく悩みました。

■
私は今、主に河川の保全工事の計画と設計を任されています。たとえば決壊しやすい河川の流れを緩やかにするとか、河川敷に人が集まるようにグラウンドや公園を設置するとか、そんなイメージをしていたくどわかりやすいかと思います。中には決壊してしまった後の修復工事といった

緊急性の高い工事もあり、こうした工事はすでに完了したのも当然あります。

■
しかし「自慢できる現場」と言われると、やはり規模が大きくて見た目にもインパクトがある現場を見せたい。ただ規模の大きな公共工事は、1年や2年という短いスパンでは終わらないものなのです。だからここでは、工事が完成した姿を発注者である国土交通省や地方自治体の方々や地域住民の方々に向け、イメージしやすいように可視化した三次元CADのパース図を

お見せすることにしました。この「可視化する」というプロセスは、完成後の姿をみんなで共有して納得した上で工事を進めるためには不可欠なもの。こうしたパース図を会議などでお見せして、「おおっ!」とリアクションされるとちょっとした達成感があります。でも実際に工事が完了し、パース図がリアルに可視化された時の達成感はそのレベルじゃないだろう、と期待しています。

学生時代のコンクリートの研究を、 もっと活かせる日が、きっと来る。



05

A・K
2012年入社
岩手大学大学院建設環境工学科修士

学生時代はずっと、コンクリートの研究をしていました。コンクリートの劣化要因やプロセスを調べる研究に取り組み、劣化の原因がわかれば耐久性の高いコンクリートや構造物を実現する可能性が高まる。そんな研究を設計段階から活かせるかもしれないと思い、建設コンサルタントを志望し、入社しました。

■
今は橋梁の設計を担当していますが、設計の内容を大別すると「新設」と「補修・補強」があります。私の場合は「新設」を任されることが多いのですが、学生時代の研究が少なからず活かされたと感じるのは「補修・補強」のプロジェクトですね。現場に行ってみて、たとえばびび割れが発生して錆が見られるのであれば、どこからか水や塩の侵入経路があるのかもしれないと想像してみたり、実際の橋梁に近い環境

下の供試体をつくって試験したりする中で、学生時代の経験が少しずつ活かされているように感じます。

■
「新設」の橋梁だと、研究が「活かされた!」と感じたのはまだ一つだけ。蔵王温泉に近い橋梁のプロジェクトでしたが、計画の提案に学生時代の研究で得た知識や経験を盛り込みました。そんな橋梁設計の仕事を重ねるたびに、責任感が強まっていくのを感じます。自分の提案や計画、設計が一つ間違えば、安全を脅かし、最悪の場合人の命を奪うような大きな事故を誘発したりするかもしれない。そう考えると、責任重大ですね。

■
今後は今以上に学生時代の研究を活かし、自信を持って提案できる仕事を増やしていきたい、と感じています。

数ある橋梁設計の中に、 自分の爪跡を残したい。



06

S.O
2011年入社
法政大学デザイン工学部卒

入社4年目の2014年から、東京支店に配属されました。ちょうどその頃から支店の受注額が急速に増え始め、支店専任の技術部門を設置・強化しようという流れの中で、私も赴任いたしました。

私の担当は、橋梁の設計。支店に来たばかりの頃は一人で担当できる規模がほとんどでしたが、だんだんと複数の設計担当者で対応しないと難しい規模の橋梁が増えてきました。「支店が伸びているんだなあ」と実感できるから、どんなに忙しくても「がんばろう」と思えましたね。

そんな中、単に仕事をこなすのではなく、設計の一つひとつに「自分が関わったからこうなった」という爪跡を残そうと心がけています。ここ数年で橋梁の改修・修繕工事の設計も増えてきていますが、写真の西郷橋はまさにそれ。1931(昭和6)年にできた橋ですが、単に新しい橋へ架け替えるのではなく、当時の面影を残しながら街並みや景観に溶け込ませつつ、安全性にも配慮・適合した設計になっています。

大学時代には都市計画を学び、漠然と「そういう仕事がしてみたい」と思っていました。今の橋梁設計という仕事は、都市計画とは専門が異なります。しかしながら今、「古くなったからといって、全部新しいものにすればいいというものではない」という意志を持って業務に携わっているのは、大学時代に街並みや景観のことを考えていた素地があったからかもしれません。

07

H.W
2019年入社
東北学院大学法学部卒



土木工事を、「見える化」する。 この仕事は文系出身でも面白い。

私の仕事を一言で表現するなら、「橋梁の工事を『見える化』すること。専門的には「CIM(シム:Construction Information Modeling/Management)」と呼ばれていますが、土木工事において設計図にある各種の数値・データをもとに完成時や工事の様子を3次元モデル化して、よりイメージしやすくする、という仕事に取り組んでいます。

完成時の仕上がりも3次元化するのはもちろんですが、それに加えて工事のプロセスも3次元化します。たとえば工事の途

中、資材を置くスペースや、建設機械を設置するスペースをきちんと確保できるかどうか「見える化」します。これにより、実際に現場で施工する方々の準備がしやすくなればいいな、と思っています。

「なればいいな」と言うのは、まだ私が関わった「CIM」の案件で工事が完了したものがないから。「CIM」はまだ、大型の案件のみに適用されています。一般にそのような工事は着工から5~10年かけて完了するものなので、実際に私が手がけた「CIM」がどれくらい役に立ったかがわかり

ません。何年後に、それを実感できる時が来ることを想像すると、ワクワクもしますし、ドキドキもします。

就活している頃に、今の仕事を自分がしているとは想像もしていませんでした。最初は設計図の読み方なんてさっぱりわかりませんでしたが、新しく覚えることや発見があるたび、面白いな、楽しいな、と感じられて、今があります。私のように文系出身でも、好奇心や興味を持ち続けられれば、当社での仕事を楽しまれると思います。

国道48号改良プロジェクトが、 私の視野を広げてくれた。



今の仕事内容を一言で言えば、「道路に関わる設計と計画」です。でも今はほとんど、図面を描くことはありません。

では何をしているかというと、道路を設計するにあたって関わってくる関係各所との調整と、設計内容をプレゼンするための資料づくりが業務の中心になります。

もちろん私も、入社当初の数年間は図面を描いていましたよ。でも今になって当時を振り返ると、上司や先輩から言われたことを図面の上に再現していたにすぎな

い。そういう経験も当然ながら大事なのですが、自分の描いた図面を実際に形にするためには、国土交通省や地方自治体といった発注者の方々だけでなく、たとえば電気やガス、水道、電話といった道路の工事に伴って影響のある事業会社の方々や地域住民の方々にも納得いただかなければなりません。

そうした関係各所との調整や説明のための資料づくりも大切な役目なんだと初めて知ったのが、入社2年目に任された国道48号にまつわるプロジェクトでした。

作並温泉の近くにある、急なカーブが続いて事故の多い道路を緩いカーブに直すという、決して規模的には大きくはないプロジェクトでしたが、設計から説明資料の作成、関係各所との調整まで一連の流れを、初めて任されたことで、ずいぶん視野が広がったように記憶しています。

きっとあなたも当社へ入社して、設計の仕事に携わり、数年もすれば私のように視野が広がると思うし、広げてもらいたいです。

実績があるから、頼られる。 頼られるから使命を感じる。



入社から一貫して、橋梁の補修や補強工事の設計を担当してきました。東日本大震災後、しばらくは耐震補強工事が多かったのですが、ここ最近は竣工から40～50年を経過し、老朽化する橋梁が増えてきて、橋を通る道路の安全確保を目的とした補修工事のプロジェクトがメインになっています。

橋梁の補修設計を専門に10年ほど続けてやっていると、道路管理者で発注者でもある国土交通省や地方自治体の担当者の方から次第に信頼をいただき、緊急性のある現場の時などは直接の相談を受ける機会も増えてきます。橋梁は原則として5年に1度の定期点検が義務づけられていますが、そこで緊急の補修が必要と判断されることも少なからずあります。

そんな時、実績を積み重ねている私たちのもとへ、初期段階の相談をいただけることもある、というわけです。だから自ずと私たちも、道路管理者の方々とともに道路の安全を守っている、という意識と責任感が高まってきます。

「頼られている」と感じられるから、「自分がなんとかしなくては」という使命感も増します。写真で私の背景に映っている生瀬橋は、広瀬川にかかる橋梁で、1939年竣工と1977年竣工という新旧の橋が共存する珍しい橋梁です。いずれも供用開始から長い期間が経過する橋の上を、たくさんの車が安全に走行したり、人が渡ったりするのを陰から支えている。そんな自負があるから、この仕事を長く続けていられているのだと思いますね。

「みんなが幸せになること」が、 「仕掛け」づくりには不可欠だ。



10

S・F
2006年入社
東京大学大学院農学生命科学研究科修士

学生の頃から都市計画に興味があり、「人が集まるには『仕掛け』が必要」ということを学びました。だから就活では、国家公務員・ゼネコン・コンサルと3つの選択肢がある中で、自然と「仕掛け」がつくれるコンサルに絞り込まれました。

■
写真の奥の方に「道の駅」が映っていますね。こうした施設の計画も、私が担当する仕事の一つです。自治体から「道の駅が作りたい」とオファーがあれば、どの場所につくるのが有効か、適正な規模はどれく

らいか、どんな施設を入れるのか、といった提案をするためにさまざまな調査をします。

■
いくつかの「道の駅」の計画に携わって痛感したのは、「合意形成が大事」ということ。計画したものを図面に落とし込んでくれる設計チームとの連携といった社内の合意形成ももちろんですが、「道の駅」を実際に利用する地域住民の方々からたくさん意見や要望をうかがい、それを計画に落とし込むというプロセスが本当に

大事なことだと感じています。地勢的な観点やマーケティングの観点から「これがいい」と考えるコンサル側の意見と、私たちの手を離れた後に利用される地域住民の方々の意見を交換し、合意形成を図る。「道の駅」以外にも自治体が運営する公共施設や震災復興基本計画などさまざまな計画の提案に携わってきましたが「人が集まる『仕掛け』づくりには合意形成が不可欠だ」と学ばせてもらいました。これからも「みんなが幸せになる」仕事を、たくさん手がけたいと思います。

風力発電のための環境調査業務は、 自分の「好き」が、あふれている。

振り返ってみると、自分の「好き」が今の仕事に活きている実感があります。大学時代、軽音楽部でバンドを組んだくらい、音楽は好きでした。その影響もあって、大学で専攻したのは「音」に関する研究。「学んだことが活かせる」と教授に紹介されたのが、当社でした。

■
今は、写真にある風力発電事業推進の根拠となる環境調査の仕事をしています。たとえば、風車を建てた際に発生する騒音に問題はないかとか、鳥などの動物がぶつかった場合の生態系への影響はないかとか、風車の影で困ることはないかとか。いわゆる「環境アセスメント」に必要な調査を行い、その結果を事業体に報告しています。報告の内容に問題がなければ事業は先に進みますし、問題があればその改善に向けた環境保全措置を提案します。

■
調査には、1年以上はかかります。四季を通じて周辺の環境がどうだったかを調べる必要があるからです。調査結果を踏まえて提案した環境保全措置を施すのにも時間が掛かります。そのため、私が調査を手がけた案件で設置が完了した風力発電はまだありません。一方で調査の案件自体は増え続けており、いずれ設置完了も増えると予想されるので、今から楽しみで仕方ありません。

■
もともと動物が好きなのもあり、「音」に加えて「動物の生態系」にまつわる調査も興味が尽きません。風力発電の設置予定場所は全国に広がっているので、遠くの現場に行くこともあって大変ではありますが、自分の「好き」にまつわる仕事は楽しいです。



11

R・H
2019年入社
福島大学理工学群共生システム支援専攻卒

仕事に誠実な人ばかりでできている。 だからこの会社が好きなんだと思う。

TOP

代表取締役社長
菅原稔郎

1983年入社 東北学院大学法学部卒



私も新卒で、就活をして当社へ入社した一人です。しかも文系出身だから、技術のことはまったくわからない。ずっと総務人事畑で来た人間だから、社内でも「亜流」だと思っていたので、まさか自分が社長になるとは考えていなかったし、「やりたい」とも思っていなかった。

じゃあなぜ社長を引き受けたのかを改めて考えてみると、一言で言えば「この会社が好きだから」だと思います。どこが好きかと言えば、社員の人たちがみんな仕事に対して誠実な人ばかりだということ。自分たちの技術が橋や道路といった社会インフラの安全に寄与している、と仕事を通じて実感するわけですから、社会的責任の意識が芽生え、自然と誠実さが根づいているのかもしれない。

ISO認証取得や人事考課制度の改編、新しい研修プログラムの導入の時でも、最初は難色を示したりするものの、実際にやることが決まると真摯な姿勢で取り組んでくれる。彼らがふだん触れている技術や知識は常に最新のものとアップデートされるものだから、新しいものにも誠実に、素直に順応できるのかもしれない。

だから当社が求める人物像を語るとしたら、学生時代の専門分野などよりも「誠実な人」「素直な人」ということになると思います。私は面接で「他社の選考状況はどうか」などの質問をしたりします。どのような会社と当社を比べているかどうかを知りたいのではなく、そんな質問に率直に答えてくれるかどうか、が知りたいからです。

建設コンサルタントは、 意外と楽しい。

ここまで、建設コンサルタントが
どんな仕事をしているのか、ご紹介してきました。

「カたいなあ」と感じられた方もいるでしょうが、それは確かにそう。

だけど彼らはみんな、オンとオフの切り替えだったり、

プライベートの充実だったり、バランスを取りながら働いています。

このページでは、社員旅行やバーベキュー、運動会などの

社内イベントの様子を写真でご紹介します。

建設コンサルタントは仕事も遊びも、

意外と楽しんでいるのです。

